

SAILORS

Yamanashi University
TANAKA's SEMINAR

学生が社会人にインタビュー！

山梨で活躍している人の生き方を伝える



ごあいさつ

この冊子は、『山梨で活躍している人の生き方をまとめた冊子を作り、県内の学生に広めたい!』という気持ちから、山梨大学生命環境学部田中敦ゼミ3年生が作成したものです。

この冊子の1番の目的は、学生の進路の選択肢を増やすことです。

昨今、地方における若者の都市部への流出が問題となっており、山梨県も例外ではありません。山梨県出身のわたしたち自身、高校を卒業して山梨大学に進学しましたが、入学当初は、『山梨で生きる未来』というビジョンが全く持てないでいました。『公務員』や『医者』、『先生』など、目に見える職業以外にどんな生き方があるのか分からなかったのです。漠然と『将来は東京に出たほうが活躍できるのではないか』という思いもありました。

しかし、ゼミ活動などを通じて、山梨で働く方々のお話を伺っていくなかで、県内でも様々な働き方があることを知り、自分たちが思っている以上に県内での将来の選択肢の幅が広いことに気が付きました。この経験を伝えることで、多くの学生が無意識に捨ててしまっている『山梨で働く将来像』も選択肢の一つに加えてもらい、より多くの可能性を吟味してほしいという思いで、この冊子を作りました。

従来の就職支援誌というと、就職活動に関する情報が主であり、また企業に焦点をあてたものは企業の情報や宣伝も含まれており、企業本位になっているものも目に付きます。しかしこの冊子は、山梨の社会人の働き方・生き方を紹介するものであり、企業というよりそこで働く人に焦点を当てたものとなっています。また、実際に学生の立場で知りたいと思っている情報を載せることで、『学生のための』ものに仕上げました。

この冊子は決して『山梨で生きる』ことを勧めるものでも、『東京に出る』ことを否定するものでもありません。山梨でも活躍できることを知ってもらった上で『じゃあ自分はどうするか?』と進路を考えるきっかけにしてもらえれば嬉しく思います。

山梨大学生命環境学部田中敦ゼミ3年生



CONTENTS

004 就職に関するアンケート

006 **山梨→東京→山梨**

【やりたいことの先に生き方が見えてきた】— BEEKDESIGN 土屋誠さん

010 **→山梨**

【『好き』を原動力に 生まれ育った街を支える】

— 株式会社早野組 田中友浩さん 白須瑛紀さん 金丸香さん

012 **山梨→神奈川→山梨**

【社会人になって見えた "新しい自分"】— 株式会社フォネット 小俣美沙紀さん

014 **〈SpecialColumn〉**

【大学の学びを生かして 『わたしたち、山梨で就職します。』】

— 山梨学院大学 赤川菜摘さん 山梨英和大学 深津菜那さん

山梨県立大学 土屋朋大さん

016 **→山梨**

【自分の気持ちを大切に まずは1歩踏み出すことから】

— 株式会社ネオスペース 石倉千春さん

020 **→山梨 / 新潟→山梨**

【選択の幅を広げてみることで出会える道がある】

— アスフィール株式会社 梶原春菜さん 興津拓さん

022 **千葉→山梨 / 栃木→山梨**

【自分を知ることによって将来像も見えてくる】

— 笛吹川温泉別邸坐忘 小林裕介さん 池田はるかさん

024 **山梨→東京→山梨**

【学生時代の経験を糧に 映像を通してふるさとを伝える】

— やまなし観光推進機構 武川清志朗さん

030 **SUPPORTERS お名前掲載**

031 編集後記

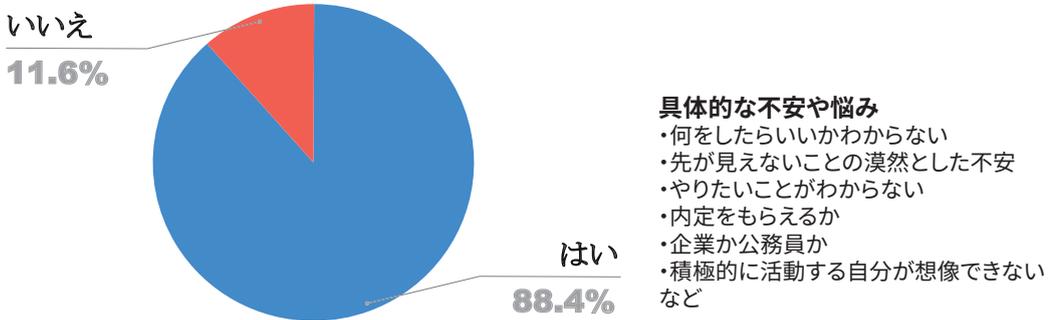
わたしたちはひとりひとりが
人生という大きな海を航る船乗りです。
この冊子に関わってくださった
すべての方(SAILORS)に
感謝の気持ちを込め、
タイトルを付けました。

就職に関するアンケート

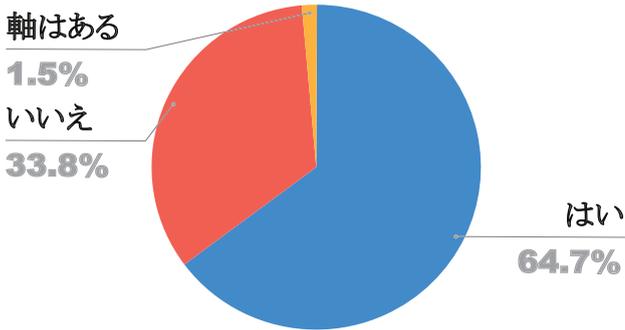
「これからのキャリアってどう考えたらいいの？」
 「ほかの大学生はどんなことを考えているのだろう」
 わたしたちは、この冊子を発行するにあたり、
 就職活動を前にする学生の、就職活動についての現段階での気持ちを
 調査しました。

調査期間:2019年1月9日～1月14日
 調査対象:県内3年生を中心とした大学生69名

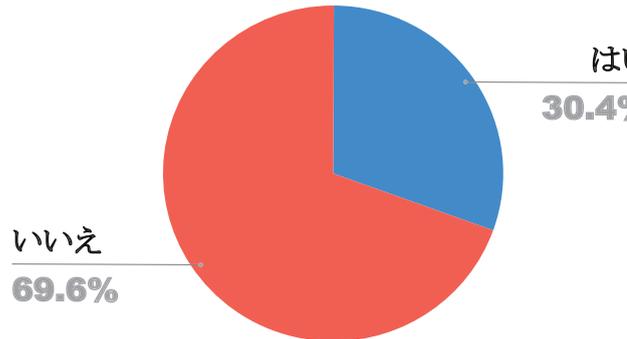
Q1.就職活動をするにあたって不安や悩みはありますか？



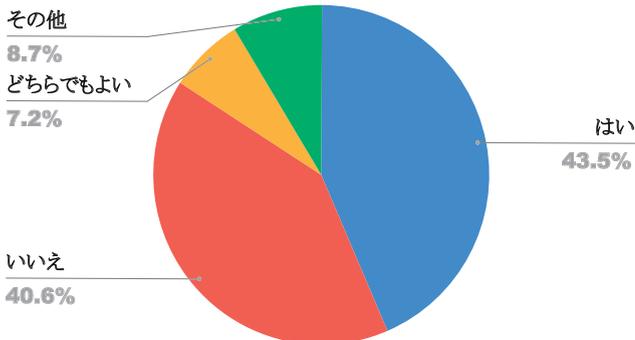
Q2.自分の就きたい業種や職種は決まっていますか？



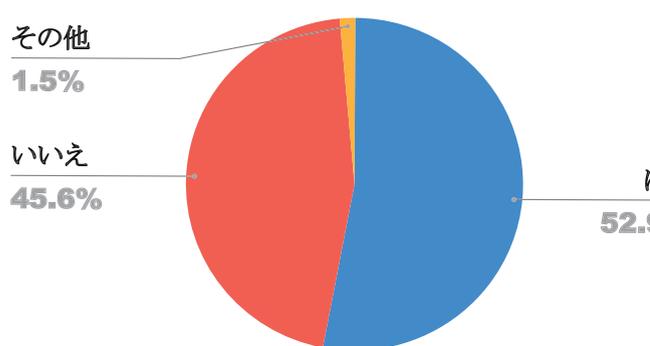
Q4.転職にマイナスなイメージはありますか？



Q3.就職は都会でしたいと思いませんか？



Q5.自分の周りにロールモデルはいますか？



Q6.就職してからの理想の姿はどんなものですか？

自立した生活が送れるようになること
 キャリアアップをして、海外勤務を目指す。
 よく考えてから物事を決めて、自分の意見をはっきり言える。
 どんな仕事でもそつなくこなす人
 仕事を楽しんでいる人
 目標をもって仕事に取り組める人
 常に先を見据え、行動できる人
 自分の仕事に誇りを持ち輝きながら働いている
 仕事をきちんとこなして、人間関係もうまくいっている
 テキパキ仕事をこなして、休日にも充実した生活を送る。
 仕事を嫌いにはなりたくない。
 最終的に、特別な贅沢は求めないが自身と家族が安定して楽しく生活できるだけの収入が欲しい。
 自分の信念をしっかりと持って働く姿
 ワークライフバランスがしっかりと保たれ、多少辛いことはあっても公私共に充実している
 同僚から必要とされること
 定時退社で土日祝休みの、私生活が充実しているもの。
 みんなに必要とされる人
 やりがいを感じながら、楽しく仕事をしている
 一人で好きなことをして生きていける姿
 やりたいことをやれている
 いつも気持ちの良い挨拶ができる人になりたい。
 いいお父さん
 家を買う。家庭を持つ。趣味を楽しむ。
 仕事とプライベートをいいバランスで、上手く楽しめる社会人
 自立し、責任感があり、きらきら輝いている自分
 自身の「出来ること」を下敷きにして、周りのニーズに応えられる仕事をする。
 その道のプロ
 オンオフがはっきりしている。定時に帰る。有給で海外旅行に行く。子育ても家族との時間もしっかりとりたい。
 様々な人と出会い、毎日充実した生活を送れている姿
 少なくとも自分のやるべき仕事はしっかりできて、広い視野で動いたり考えたり出来る姿。
 長く働き続けること
 自分のことではなく誰かのことを一番に考える姿
 バリバリ仕事できる人
 なりたかった姿に向かって一生懸命取り組む
 仕事にやりがいを持っている姿
 人から慕われる姿
 転職したいと思わないくらいその職に没頭する
 仕事と家庭を両立する
 残業でヘトヘトになっていない姿
 自分をそこそこアップデートし続けて、楽しく仕事してお金を稼ぐ姿。
 死にそうな顔をしていない
 など

〈アンケート結果から〉
 就職活動について不安や悩みがある人の割合は約9割とかなり多いが、就きたい業種が決まっていたり、目指している姿があったり、また働くことには意欲的なことがわかった。
 さらに、どこで働くかよりやりたいことができるかを重視している人が多いこともわかった。

はい
4%

はい
52.9%

やりたいことの先に 生き方が見えてきた

土屋誠さん

1979年、山梨県生まれ。山梨県立石和高等学校(現・笛吹高校)を卒業後、山梨学院大学経営情報学部へ入学。大学を卒業し、笛吹市の実家でアルバイト生活の後、地元の出版社へ勤務。24歳で上京。10年間東京で編集者／アートディレクターとして活動後、2010年に独立。2013年に山梨県北杜市にUターン移住。雑誌『BEEK』を創刊。現在は編集者・アートディレクターとして仕事をする傍ら、『BEEK』を発行。プライベートでは2児の父。

【雑誌『BEEK』】

やまなしの人や暮らしを伝える」ことをコンセプトにした雑誌。土屋さん自ら取材からデザインに至るまでを一人で行い、発行している。「山梨のことを知ってもらいたい」という気持ちからフリーペーパーとして配布。現在、6号目まで発行されており、山梨大学附属図書館にも設置されている。

<http://beekmagazine.com/>



周りに『前ならえ』でスーツを着て就職活動をするのが嫌だった

「学生時代、周りが就職活動を始める時期になっても、自分はやりたいことも将来の展望も見出せませんでした。それに、誰もが同じような格好をして就職活動を行っていることに違和感を覚えていたんです。そこにそれぞれの意志はあるのかな、なんか変だなって。それと、スーツを着るのが嫌だったという非常に不真面目な理由で、就職活動は全くしませんでした。」

行きついたのは、”好きだったこと”

大学を卒業した後、1年半ほど笛吹市にある実家に住みながらアルバイト生活を送る。

「フリーター生活を送りながら、なんとなく興味を持っていたグラフィックデザインなどを独学でやる日々でした。しかし、『さすがにずっとこの生活をしていられない』という気持ちもあり、昔から好きだった雑誌を作りたいと思うようになったんです。」

その思いから、山梨のタウン誌を扱う企業に就職する。

「大きな会社ではなかったので、様々な仕事に携わることができました。入社当時はなんのスキルも持っていませんでしたが、写真やデザインから営業にいたるまで、すべてを1から学びました。今思うと、本当にありがたい環境でした。」

24歳で上京

「仕事をしていくうちに、山梨では雑誌カルチャーがあまり発達していないと感じたんです。やはり、第一線を走っている東京で学びたいという思いが強くなり、上京を決意しました。」

東京では、何度か転職をしながら自分を磨いていったという。

「転職は、その都度やりたいことが見えてきて、それができるような会社へ移っていったという感じです。人間関係が上手くいかないなどのマイナスな理由ではなかったので、すべての会社を円満退社できました。人の入れ替えが激しい業界だったこともあり、転職へのハードルはそこまで感じたことはありません。」

そうして、いくつかの会社で多くのことを学んで身に付けていくうちに、独立したいと考えるようにな

「当時勤めていた会社の社長に本当によくしていただき、その時受け持っていたクライアントをそのまま引き継いで独立させていただくことができました。」

山梨にUターン移住

独立を果たし、順調に仕事を続けていたが、数年後、過労で体を壊してしまう。

「それまでは来た仕事はとにかく全部受けていたんですけど、働き方を見直す必要があるなと思いました。もともと山梨が好きで、仕事帰りに温泉に入れるような環境で働けるなんて最高だと思っていたので、いつかは地元に戻りたいという気持ちがあって。また、デザインの仕事なので、東京のクライアントのものでも山梨にしながら十分にできます。プライベートでも当時、ちょうど上の子の幼稚園を考える時期だったので、戻るなら今かなと考えました。」

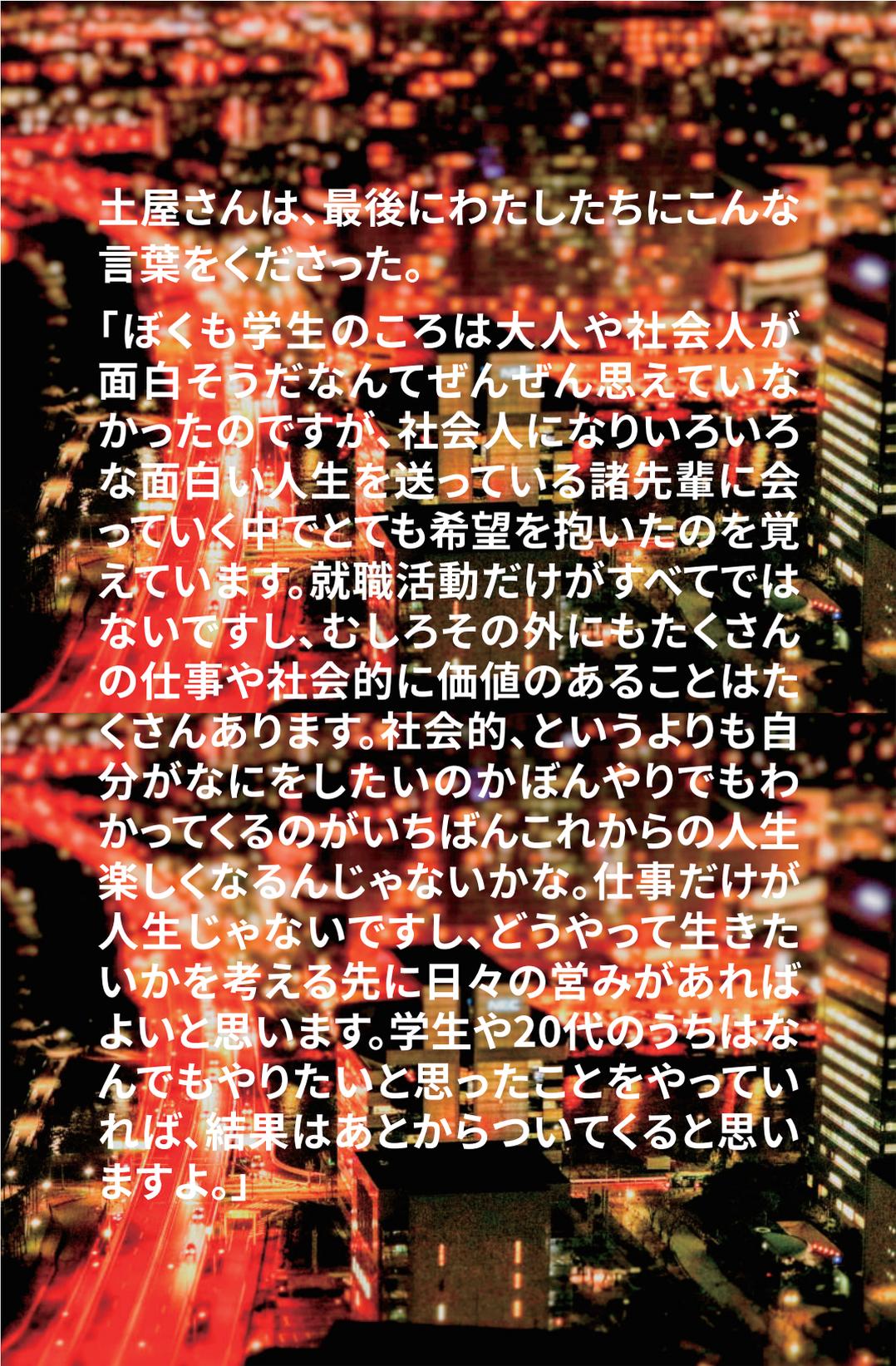
山梨に帰ってきて、編集者・アートディレクターとして活躍する傍ら、雑誌『BEEK』を創刊する。

「地元を長い間離れていたこともあって、自分には人脈がありませんでした。でも、『BEEK』制作のためのフィールドワークなど通じて山梨の人とのつながりを築くことができています。こうして学生の方にインタビューして頂ける機会もできましたので。」

常にやりたいことを追いかけている土屋さん。今後の展望を聞くと、「40代で小説家デビューすること」だと笑顔で話してくださいました。

東京と山梨

「どちらにも、良いところ・悪いところがあり、人それぞれ感じる場所は違うと思うので、あくまで個人の意見ですが……。東京は、人がとにかく多いので、それだけ個性的な出会いもたくさんあります。色々吸収して成長できる環境が整っていて、いいところだと思います。ただ、ずっとあそこに住むことは考えにくかったですね。山梨は、居住環境、子育ての面でいいところだと思っています。また、若い頃は職業選択の幅があまり広がらないと思っていましたが、知らなかっただけで、色々な職業の人が活躍していますし、本当にやりたいことは自分で実現してしまえばいいと思います。」



土屋さんは、最後にわたしたちにこんな言葉をくださった。

「ぼくも学生のころは大人や社会人が面白そうだななんてぜんぜん思えていなかったのですが、社会人になりいろいろな面白い人生を送っている諸先輩に会っていく中でとても希望を抱いたのを覚えています。就職活動だけがすべてではないですし、むしろその外にもたくさんの仕事や社会的に価値のあることはたくさんあります。社会的、というよりも自分がなにをしたいのかぼんやりでもわかってくるのがいちばんこれからの人生楽しくなるんじゃないかな。仕事だけが人生じゃないですし、どうやって生きていかを考える先に日々の営みがあればよいと思います。学生や20代のうちはなんでもやりたいと思ったことをやっていたら、結果はあとからついてくると思いますよ。」



〈学生のつぶやき〉

周りに流されたり、嫌だと思ったことを我慢したりする人生ではなく、自分が熱意をもてることを突き詰める人生だなと感じた。普通の学生は、なんとなく周りに合わせたり、肩書きや企業名だけを見たりして就職を考えてしまいがちだが、いま一度「自分の本当にやりたいこと」に立ち返って就職・これからの人生を考えることが大切だと思った。(三科)

山梨に育てられた自分に 今できること

田中友浩さん

建築本部工事に所属し、事務を担当している。小、中、高、大と山梨で育ち、そのまま山梨で就職した。

「建設の仕事は街の形成に直接影響しています。自らがそれに携わることで、幼いころからお世話になってきた地域の方々に恩返しができるかと思います。」

自身の経験をふまえ、学生にメッセージをいただいた。

「就職活動を振り返り、もっといろいろな会社の話を聞けばよかったなあと思います。聞かないと、会社同士の魅力を比べることもできないので。そしてより多くの選択肢のなかから、自分に合った企業を見つけてほしいです。」

見えない会社を 見つけ出してほしい

白須瑛紀さん

舗装本部工事に所属し、現場監督を務める。生まれてからずっと山梨で暮らしてきたなかで、自然と県内で働きたいと考えるようになった。

就活が始まった時、説明会での企業の選択肢の多さに驚いたという。事前に情報収集をしておけばよかった、と当時は後悔した。

「もし昔の自分にアドバイスを送るとしたら、『もっと積極的に情報を集めてみるように』、あと『実際に働いている人の話を聞いてみるように』とアドバイスしたいです。」

これは実際に社会に出てから気づいたことだけど、山梨には会社の数自体は多い。ただ実際に目にする機会はあまりないんです。広報まで手が回らなかったり、企業向けビジネスをやっていたりする会社が多いのかな。もっとインターンシップや説明会に行き、自分から会社を見つけに行ったり、話を聞きに行ったりすればよかったと今では思います。」

『好き』を原動力に 生まれ育った街を支える

【株式会社早野組】

山梨県内を中心に活動するゼネコン。「地域に根ざした総合建設業として社会資本の整備と公共の福祉に貢献することにより、社是『和』の下にお客様・社員・パートナー会社などすべての関係者の幸せを達成する」という経営理念で、お客様の「暮らしやすさ」の向上を目指す。

<http://www.hayano.co.jp/>

お母さん兼一級建築士 山梨の女性建築士の パイオニア

金丸 香さん

土木部の現場を経て、一級建築士の資格を取得。現在は営業本部・営業企画積算部でリニューアルを担当している。

「好き」が続ける力になる

父親が大工だったため、小さいころから作業場や現場を見る機会もあり、構造物が自然と自分の身近にあった。そのため物心ついたときから、建設業に関わりたいと感じるようになっていた金丸さん。就職当時、県内で設計や建設コンサルには女性技術者がいたが、土木系の現場技術者の先輩はいなかったという。

「就職氷河期に加え、女性の正社員登用も今より厳しかった時代でした。大学から推薦を得ることができず、どうしようかと途方に暮れたこともありました。」

周囲からも反対を受けるなど、女性が土木の技術者になるのはかなり難しかった。

それにもかかわらずなぜ、挑戦を続けることができたのだろうか。

「女性だから、という理由で建築の仕事を諦めることはできませんでした。負けるもんか、まずは自分で挑戦してみよう、と。なによりも、建築に関わりたいと思っていたので妥協したくはありませんでした。その気持ちを貫き、今の会社にたどり着きました。」

女性だから認められないという理不尽さへの反発心に加え、建築の仕事にどうしても携わりたいという気持ちが初志貫徹の原動力となった。

「ひとつひとつの仕事に携わり、完成を見届けたときは嬉しいですね。出来上がった建築物は、我が子みたいなものです。あのとき、諦めなかったからこその今だと思っています。」

家族も仕事も

バリバリ働きつつも、「家族あつての仕事」と語る金丸さん。

お子さんについて語るその表情は優しいものだった。

「仕事も大事ですが、休日は子どもと一緒に過ごす家族の時間も大事にしています。自分で設計した建物を見せて『これお母さんが建てたんだよ』って子どもに自慢したりして。早野組には育児中のフレックス制度があるので、時間の融通が利き、お母さんと仕事を両立できています。」

『できるコト』より『やりたいコト』を

「山梨で出来る仕事が少ないとよく言われますが、できる仕事は何かではなくて、したい仕事は何かを見つけることの方が大事な。それに、今では女性が活躍できる場所が山梨にも増えてきているように感じます。だから、やりたいことを簡単に諦めてほしくないです。これは昔の自分にも言いたいことですが、今の学生には悩まず、まずはやりたいことに挑戦してほしいです。」

〈学生のつぶやき〉

「自分のやりたいことがわからない」という学生は、結構いると思います。そういった自分自身の興味関心は意外なきっかけで見つかるものだし、わたしも含め、様々な分野で視野を向けてみるのが大事だと感じました。自分がやりたい仕事ができる会社を宝探しのように、『自分で見つけ出してやる!』という気持ちがあると、就職活動もまた別の見方で行えるのではないのでしょうか? (山田)



左から 田中友浩さん 金丸香さん 白須瑛紀さん

社会人になって見えた"新しい自分"

小俣美沙紀さん

山梨県都留市出身。神奈川県を卒業後、株式会社フォネットに入社。現在は入社3年目にして都留店の店長を務める。



【株式会社フォネット】

13社から構成される「フォネットグループ」として様々な事業活動を展開している。その中核となる会社が株式会社フォネット。イオンモール甲府昭和、ラザウォーク甲斐双葉、イオンモール松本等の中にau、SoftBank、Y!mobile、UQmobile、Totalshopフォネットを31店舗展開し、IT機器を販売している。また新たにAI画像認識カメラを用いて、Sports解析分野やFintech分野で企画開発販売事業も開始したとのこと。更に従来から推進している、山梨のトレンド情報を発信するFreeマガジン「Chusma」の発行、富士登山用品レンタルshop「Lamont」や富士山サイクルアクティビティshop「Bonvelo」の運営、富士山周辺の魅力的観光素材を発信する観光情報webサイト「富士山県」 <https://fujisan-pref.jp/> の運営など、山梨を盛り上げる様々な事業を精力的に行っている。

<https://phonet-gr.jp/>

山梨で働きたい

「高校の時にやりたいことがなかったので、オールジャンル学べるような学校に通いながら、やりたいことを見つけようと思いました。」

神奈川の大学に進学した小俣さん。就職活動の時期を迎えると、周りの学生の多くは都内のセミナーに参加したり、大企業を受けたり、そのまま都市部での就職を考えて動いていた。そんな環境にしながら、小俣さんは何故、就職先を山梨に決めたのだろうか。

「もちろん、わたしもそのまま神奈川に残ろうか迷いました。それでも山梨に戻ったのは、本当に大した理由ではないのですが、都会で暮らすという想像ができなかったからです。たくさん人がいたり、満員電車だったり……。遊びの場としてはとても楽しかったのですが、やはり働き、生活する場所は、山梨だなと思ったんです。」

しかし、「これをやりたい!」と思うことが決まっていなかった。

「とりあえず、就活用の企業検索ページで山梨の企業を調べていきました。そうしていくうちに、居酒屋でアルバイトをしていた経験を活かしたいという気持ちやお客さんと関わる仕事が好きという気持ちから、接客業に目が留まるようになりました。」

就職活動を通して成長を実感

何社か面接を受けていくうちに感じた、就職活動の面白さがあったという。

「はじめは緊張で履歴書も面接もうまくいきませんでした。経験を積むにつれて雰囲気がかめてきて。だんだんと自信がつき、自分の本来の良さをアピールできるようになりました。最終的には冗談を交えられるようにも。就職活動を通して、自分の成長を実感できました。」

"今の自分"だけで選択肢を狭めないで

入社3年目にして店長を任されている小俣さん。だが、学生時代はリーダーシップをとる役割は避けて生きていたという。小俣さんを変えたのは、『周囲からの評価』。上司や同僚に自分の仕事ぶりを認めてもらえたことで意識が変わり、自分を変えたい、もっと成長したいと思うようになったと話す。

「壁にぶつかっても、成長の1歩ととらえ乗り越えようと思うことで、やりがいが見つけられ、楽しみながら働けるようになりました。今後も、さらにステップアップしていきたいです。」

働く中で芽生えた向上心。社会人になり手に入れた、"新たな自分"で、小俣さんは今後も活躍していく。

新入社員は人生で一度きり

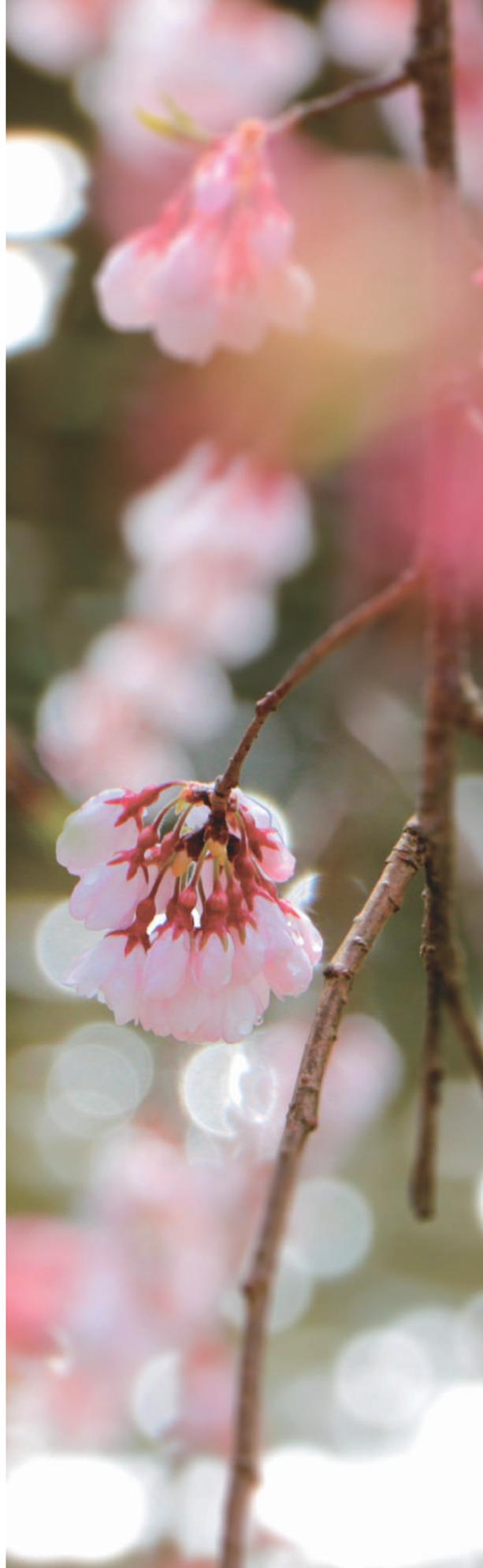
入社後の新入社員研修でお世話になった先生に言われた言葉で印象的だったものがある。それは"新入社員を味わえるのは人生で一度きり"というもの。

「新入社員の1年間は、覚えることだらけでくじけそうにもなりました。でもいっぱい吸収していっぱい学べる、そんな貴重な期間だと思うことで頑張ることができました。誰もがやりたい仕事につけるとは限りませんが、どんな仕事についても"新入社員"は人生で1度。まずは1年間頑張ってください。」

最後にそうアドバイスをくれた。

〈学生のつぶやき〉

社会人というと、辛い・きついというマイナスイメージが強く、大人になりたくないなんて思ったりもしていたけれど、小俣さんのお話を聞いて"社会人になること＝自分を成長させること"なのだ学び、少しわくわくした気持ちになった。もちろん大変なことはたくさんあるとは思いますが、新たな世界で自分がどう変わっていきたいのかを考えることで、就職活動もポジティブに頑張れそうである。(今井)



大学の学びを生かして

『わたしたち、山梨で就職します。』

今回、特別企画として就職活動を終えられたばかりの3名の4年生の方々に話を伺うことができた。大学での学び、就職活動のリアルなど、学生から見た『山梨での就職』についてお届けする。



左から深津菜那さん 赤川菜摘さん 土屋朋大さん

将来のことも考え選んだ就職先

山梨学院大学 現代ビジネス学部現代ビジネス学科 赤川菜摘さん

山梨県出身。大学卒業後は金融業界に進む。

「大学では広く浅く商業や経済の分野を学びました。それと同時に『大学時代はこれを頑張った!』と言えるくらい、簿記の勉強を頑張りました。そうして勉強していくうちに、金融系に進みたいと思うようになったんです。

就活を始めたころは県外就職も考えていましたが、都内に面接に行き、せかせか歩くサラリーマンを見たり満員電車などに乗って、『東京で暮らす想像ができないな...』と思って。東京自体はとても魅力的だし、楽しいんですけど暮らす場所ではないかなって思ったんです。遊びではなく就活として行き、普段とは違う視点で東京を体感できたのは大きかったです。また、日帰りでも何社も面接を受けたりしていたのですが、だんだんハードスケジュールをこなせていることの達成感から、就活が楽しく感じられるようにもなりました(笑)。

今の就職先に決めたのは、経済が危なくなった時に若手の私たちに与える影響が少ないこと、産休育休など福利厚生が整っていること、企業自体が安定していること、また女性が窓口だけでなく、様々な部署に配属できることがあったから。将来のことも考えて、就職先を選びました。」

講義がきっかけ 山梨を発信したい!

山梨英和大学 人間文化学部人間文化学科 深津菜那さん

山梨県出身。大学卒業後は広告業界に進む。

「3年生になって、講義で山梨を盛り上げている人に会ったり、ゼミの活動で地域のお祭りに参加したり、『大学生観光まちづくりコンテスト』に出場し、山梨について学んでいくうちに、徐々に観光事業に興味を持ちました。と同時に、出身地・山梨についてこれまでほとんど知らなかったということにも気づかされたんです。

そして、山梨のいいところを発信するという仕事も、直接的ではないけれど、観光に関わることなのかなと思って先生に相談したところ、現在の就職先を紹介されました。そしてその企業の“求めている人材”を見たときに、『自分はこれがやりたいんだ!』と気づきました。この会社以外では働きたくない、と思ったほど。

今の会社を見つける前は、やりたいことも漠然としていたので、その期間は大変でしたが、大学で山梨について学び、さらに好きになったから、山梨で働くという軸はずっとぶれませんでした。」

経験として東京で就活 やりたいことと出会うには?

山梨県立大学 国際政策学部総合政策学科 土屋朋大さん

山梨県出身。大学卒業後は、マスコミ業界に進む。

「高校時代から観光には関心がありました。大学時代は、甲府中心部の街歩きマップを作成したりするなど、地域の活動に積極的に取り組みました。大学に入るまでは勉強ばかりで行動するのが苦手だったので、まずは行動してみようと思い、いろいろな活動をしてきました。そうしたことから学びを通して、さらに山梨への愛着がわき、地元のことをもっと多くの人に知ってほしいという思いが強まりました。

“地域振興”を特に深く学んでいたため、それを活かせる職種に就こうと思いました。これまでもおこなっていたので、自分で事業を始めるのもいいな、とも考えたのですが、自分が得意なこと、やりたいことは人に直接会いに行ったり、たくさんある資源を発掘し、それらの情報を多くの人に伝えることだなと思い、マスコミを就職先に考えて、最初は県庁や市役所も考えていました。山梨での黄金ルートだし、一番想像しやすい道ですからね。でも大学で学んでいるうちに、行政は自分のやりたいこととは違うなと感じて、企業にシフトしていった感じです。

でも、観光業に進みたいのに、ずっと山梨のことしか知らないというのが引っかかっていました。将来は山梨で働きたいし、山梨のためのことをしていきたいから、外をみるのは今しかない!と思い、積極的に東京の企業も受け、外の世界にも触れるようにしました。東京での面接やグループディスカッションは、様々な大学やタイプの人がいるので、とてもいい経験になりました。学んだこととしては、ネームバリューのある大学の学生と同じ目立ち方をしていると通らないことです。東京で就職する気はあまりありませんでしたが、経験という意味では東京で就活したのはとてもよかったと感じています。するとしないでは大きく変わってくると感じました。また、経験として厳しいといわれている広告業界も受けてみたり…。僕は最初やりたいことが分からず、ESを50社くらい出したり、就活中も試行錯誤がありました。自分のやりたいことと出会えるのはめぐり合わせで、それは自分で動かないと見つからないということを身をもって学びました。」

自分の気持ちを大切に まずは1歩踏み出すことから

石倉千春さん

山梨県出身。山梨県内の短大を卒業後、美容関係の総合商社に勤め、結婚・出産後ネオスペースに転職。
営業企画補助を経験後、現在は社長室マネージャーを担当。

【株式会社ネオスペース】

様々な手法の企画・演出・デザインを基盤に、国内外の映像芸術作品などの著作物をテーマにした展覧会やイベントの企画制作や、各種施設のリノベーションに関するプロデュースなどを通して、ブランド化を行う企業。近年では、地域資源を活用したブランディングや、東京スカイツリー®タワー内のシーズン特別装飾や甲府市役所のロゴマークを始めとするサインシステム等、県内外の様々な施設や空間の演出デザインを手掛けている。作品や施設・空間が持つ魅力を発見・表現し、効果的に発信することで、人・都市・企業の活性化・文化の発展を積極的に支援している。

<https://www.neospace.co.jp/>



まずはやりたいことを優先

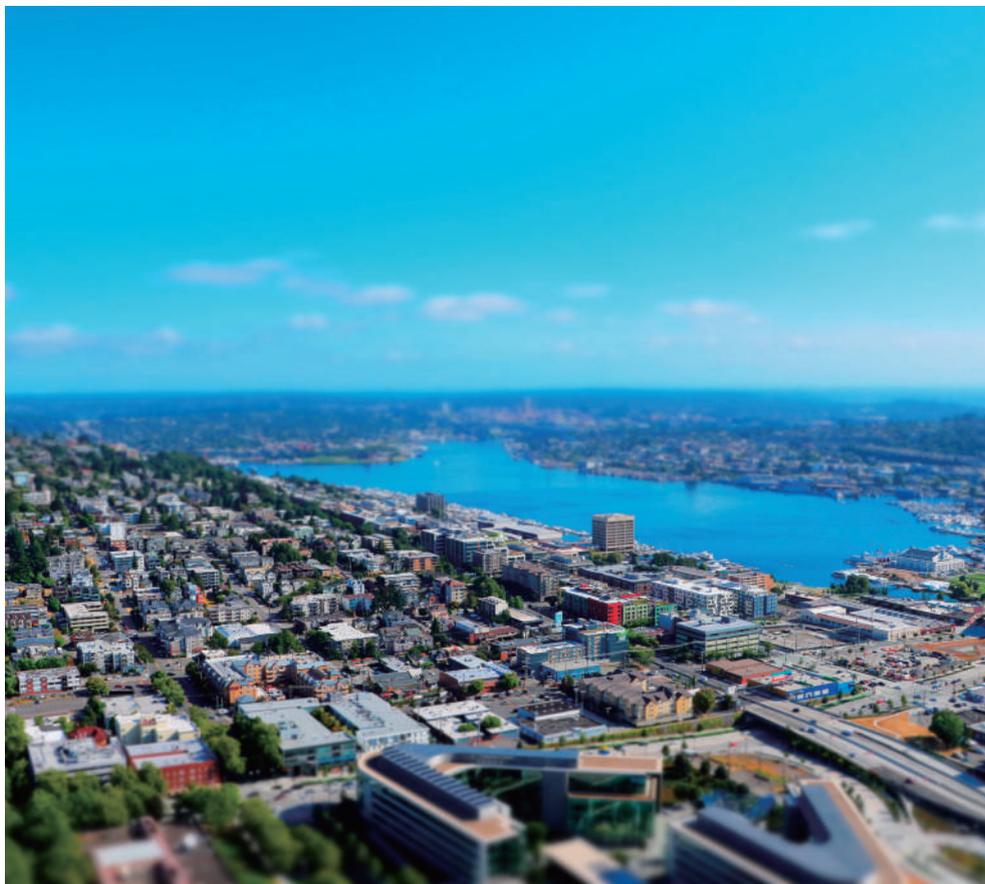
どうせ時間を過ごすなら自分のためになるものを

社長室マネージャーとしてのほか、社内の多岐にわたる業務に携わっている石倉さん。常に新しい仕事や経験に出会うという。初めてやるのが形になったときにはやりがいや喜びを感じると語った。

「就活をするうえで、損得感情よりやりたいこと・自分がどう時間を過ごしたいかを優先しました。学生時代のアルバイトを振り返って、どうせ同じ時間を過ごすなら興味を持って勉強になると感じられるような場所で仕事をしたいと考えていたんです。お金を稼ぐためだけのものとして時間を制限されてしまうのがどうしても嫌で。今の職場では仕事のほとんどが新しい経験であることが多いけれど、それをいい経験と思うか面倒だと思うかで自分の糧になる尺度が違ってくと思うんです。初めてのことをやるときって、どうしても失敗を恐れてしまうし、本当は慣れたことだけを繰り返しやるのがすごく楽。でも、それだけだと仕事をする意味には繋がらないのかな、とも思いますね。何事も経験、自分の肥やしになるんだと忘れないように言い聞かせるようにしています。」

また、石倉さんは一度も県外に出て就職をした経験はないという。石倉さんが考える山梨でできる仕事の可能性についてお伺いしたところ、こんな回答があった。

「県外に出たときにどんな仕事があるのかを知らないということもありますが、県内にいて仕事の範囲や選択肢に限りがあると感じたことはないですね。クライアントは山梨県内の方に限らず県外の方も多く、他の社員は県外へ出張に行くこともあります。だから、『山梨だから〇〇できない』ということはないと思います。」



経験は必ず肥やしになる

そんな石倉さんの前職は、現職とはまったく関係のない美容関係の総合商社。前職に在職中、結婚と二人のお子さんの出産を経て退職をしたという。その後、子育てをしながらポリテクセンター（山梨職業能力開発センター）へ通い、第二の人生のステージとなる新たな就職先を探した。

「美容関係の会社を退職したのは、15年働いて一度離れたと感じたからです。1つの仕事しか経験しないというのは寂しいなと思って、次は違うものに挑戦しようと考えていました。前職ではお客様と直に接することが多かったので、敬語やマナー、人の話をきちんと聞くスキルを身につけることができましたと思います。そういう意味では、前職と現職はまったく関係のない分野になるけれど、現職でも活かした経験になっています。仕事に対するスタンスも前職で身につけました。そういったこともあって、経験は必ず肥やしになると考えています。」

環境に応じたライフスタイル

「転職をする際にも、同じように自分のやりたいことを軸に就職活動を行いました。そこにプラスして条件も少し考えたかな。就職活動をしているときは子どもはまだ小さかったので、時間的制約や業務的にできることとできないことの範囲も限られてしまって、その部分のある程度は考慮しました。最初の1年は就職せずに家にいましたが、やっぱり外に出たいと思って。自分のコミュニティーというものを、家庭以外にもいくつか持つといいと感じました。家庭との両立も考えて、できる範囲のなかで仕事をしたいと思うようになったかな。今後は、子どもの成長とともに仕事の内容や濃さを深めていきたいと思っています。子どもも大きくなっていくので、それに応じて仕事との関わり方やバランスを考えていきたいです。」

石倉さんは最近趣味でバイオリンを始めたそう。最終的なゴールは「バイオリンの弾けるおばあちゃんになること」と笑顔で語った。



時にはダメもとの精神も まずは一歩踏み出してみて

最後に、進路に悩む学生に向けて、石倉さんからメッセージやアドバイスをいただいた。「私自身もう少し選択肢を持っていてもよかったのかなと思うので、県外に出ることも含めて、色々な選択肢を持って動いてみることも大事なのではないかなと思います。どうしても失敗したくない、上手いきたいというのを求めてしまうんですけど、時にはダメもとの精神も必要なのではないかなと伝えたいです。新しいことに取り組むときには不安がまとうと思いますが、やってみないといひも悪いもわからないので、今となってはまずは一歩踏み出してみることも大事だと感じます。就職は大きな通過点ですが、それで一生が決まってしまうわけではありません。そんなに深刻にならないで、ときには自分の気持ちを大切にしてくれることも大事なんじゃないかな。」

〈学生のつぶやき〉

一般的に、転職というものにはマイナスなイメージが持たれがちであるように思える。しかし、時には石倉さんのように生き方やライフスタイルに沿って働き方を考えるということも大事なのではないかと感じた。何かに挑戦するときには様々なしがらみがつきまとうこともあるかもしれないが、「経験は肥やしになる」という言葉を信じて一歩踏み出す勇気を抱き続けたい。(栗田)

選択の幅を広げて みることで 出会える道がある

【アスフィール株式会社】

式典用のお祝い品やコサージュ、学園祭のグラストシャツの受発注を行っている会社。

北は北海道から南は沖縄まで、全国の幼稚園～大学を担当するなど多数のクライアントを持つ。

仕事内容: 全国エリアの営業、受発注、企画、マネジメント部門など、商社の仕事をマルチタスクで行う。

<https://www.asfeel.jp/>

梶原春菜さん

社会人2年目。山梨県出身。山梨の大学に進学、そのまま県内就職で、アスフィールに入社。

『教育学部＝先生』じゃない

「親の意向で大学進学は、山梨県内しか認めてもらえず、大学は県内で選びました。私は音楽が学びたかったんですが、音楽を学べるところが県内で山梨大学の教育学部ぐらいしかなかったの、そこに進学しました。だから、元々先生になりたかったわけではないんです。大学卒業後も、出身地で愛着のある山梨で就職しようと思っていました。先生以外の道を選ぶ時に、『県内で、学んだことを活かせる職って何だろう』って考えて、学校向けビジネスができる現在の会社を選びました。」

就職活動に向けてアドバイス

「私は学生時代、周りが教職志望ばかりで、先輩や教授に聞くこともできず、就活の仕方が分かりませんでした。だから、とりあえず就職試験に共通してでてくるであろうSPIを3年の9月から繰り返して勉強し、できることから始めました。今になって思うと、大学のキャリアセンターをもっと存分に活用すればよかったかな、と感じています。キャリアセンターでは、就活を応援するセミナーやプログラムがたくさんあります。私のように、『誰にも相談できない』と悩んでいる人は、ぜひ活用するべきだと思います。」



興津拓さん

24歳の3年目社員。新潟県出身。大学で山梨に進学、そのまま県内就職した。

広い視野を持つ

「大学は理系の学科で、研究ばかりしていた毎日だったので、ぼんやりと研究職になるんだろうな、と考えていました。だから、あまりじっくり将来について考える時間をつくることもなく、就職の選考を迎えてしまったんです。業界研究・企業研究もそれほどしていなかったため、大学4年生の3・4月に受けた企業は、全部落とされました。」

就職活動の現実を目の当たりにし、焦りを覚えた。その状況を受け、就職活動への取り組み方を変えたという。

「それまでは研究職しか考えていなかったんですけど、もっと視野を広げようと思いました。自分もともと人と話すことが好きで、そこを強みとして営業もできるんじゃないかと思い、理系だけではなく、文系の職種も見て回るようになりました。」

アスフィールとの出会い

そんなとき、友人に今の会社の企業説明会に誘われて、参加したことが自身のターニングポイントとなったという。

「教育関係の物品を扱う会社で、大学で学んだ知識とは全く関係がないような会社だったんですが、業界・職種というよりも、その会社・組織の在り方、考え方に惹かれました。説明会で社長自ら会社の将来の展望を熱く語ってくれたり、実際の職場見学などを通じて、とてもフラットで風通しの良い企業で、働いている人が生き生きとしていて、自分がその会社で働いている姿を想像することもできました。面接でも、『自分』を分かろうとしてくれる・知ろうとしてくれていると感じました。だから、入社してからも社員を大切にしてくれるんだろうな、のびのびと仕事をできるんだろうなと思い、入社を決めました。」

場所は大きな問題ではない

新潟県出身の興津さんだが、就職を考える上で場所は意識していなかったという。

「自分は、『地元の新潟に戻るのか、大学を出てそのまま山梨に就職するのか、それとも東京に出るのか…』という視点では就職を考えませんでした。あくまで、『自分がやりたいことができるか、職場環境が自分に合っているか』という、組織や働き方重視で企業選びをしました。その上で、実際に働いていて思うことは、『山梨だから～ができない』といったディスアドバンテージは無いということです。今はテレワークなど情報技術も発達しているし、都会で出来ることの多くは山梨や他の地方でも十分にできます。学生の時は山梨でできる仕事が少ないイメージが自分にもあったけど、田舎だろうが都会だろうが、結局はその仕事を行う会社や人次第。前例がないなら、自分がパイオニアになろう、という気持ちで仕事に取り組んでいます。」

まずは自分のことを知ってほしい

自身の就職活動で出遅れた経験から、自己分析に悔いがあるという興津さん。もし昔の自分にアドバイスを送れるとしたら、「自分を知らない」と言いたい、と話す。

「自分についてよくわかっていないと、外の情報を得ても判断がつかないことが多々ある。初めから自分のことを決めつけて視野を狭めるんじゃないくて、『何をやりたいか』という気持ちで説明会などにたくさん出て、いろいろな業界を知るといいと思います。」

〈学生をつぶやき〉

「自分は文系だから」などという理由で、その業界や職種についてよく知らないで「興味がない」と決めつけてしまう学生は多いと思う。でも、「やりたいことがわからない」と悩んでいるくらいだったら、就職活動の初期の段階で様々な業界に目を向け、たくさんの企業と出会うことで、おのずと自分の進みたい道が見えてくるのではないかと思った。（三科）

自分を知ることによって将来像も見えてくる

【笛吹川温泉 別邸坐忘】

美しい自然と天然温泉、山のごちそうなど、心にも身体にも安らぎを提供する宿。2015年秋、新たに離れを開業し、全18部屋となる。築140年の古民家を改装した懐石料理『まる喜』では茶懐石が振舞われ、多くの宿泊客を魅了している。また、日本最古のワイナリー、まるき葡萄酒への訪問や笛吹川フルーツ公園から望む新日本三大夜景を楽しむツアーなど、無料のアクティビティも豊富。

<http://www.fuefukigawaonsen.com/>

小林裕介さん

千葉県出身。新卒時はパチンコ店に就職。東京、千葉、神奈川で15年勤務した。その後坐忘に転職し、現在は主にフロント業務を担当する。



池田はるかさん

栃木県出身。東京の大学卒業後、都内の学童保育所で3年間勤務。2018年4月に山梨に引っ越してきた。現在は坐忘で仲居として働く。

続けてみることで分かることがある

小林さんは、もともと接客業に就きたいとは思っていたものの、明確な意思を持たず、周りに流される形でパチンコ店に就職。しかし、そこで接客業を基礎から学び、その魅力とやりがいを見つけた。そして、パチンコ店で培った接客スキルを、興味のある宿泊業で活かしたいという気持ちから、転職を決めた。

「もし、昔の自分にアドバイスを送るとしたら『とにかく働いてみな』って言いたいです。自分の前の職業についても『パチンコ店なんて…』っていう偏見を持つ人がいると思いますが、実際やってみると今でも役立つスキルがたくさん身に着きました。だから、モチベーションがなかったり、きついなあと思っても、まずは続けてみることをおすすめします。きっと自分が思っている以上のことを学べるから。」

自分の強みを知っておく

池田さんは転職先を探しているなか、とあるホテルの面接で『自分をこの会社でどう活かせる?』と質問され、うまく答えられなかったという経験から、自己分析の大切さを学んだ。

「自分の強みをつくっておけばよかったなと思います。『これだけは人に負けない!』というものがあれば面接とかも自信をもってできたんじゃないかな。やっぱり自分を知り、強みをアピールできるようにしておくことは大事だと思います。」



自分で機会を作る

これから就職活動を迎えるわたしたち。やりたいことが見つかるのか、内定が決まるのかなど、先行きが不透明で焦りや不安を感じていると相談したところ、小林さんがこんなアドバイスをくださった。

「ぼくの経験からいうと、それは社会を知らないからだと思います。知らないものに挑むのは確かに怖いです。だから、気持ちに余裕を持っておくことが大事。面接にいきなり挑むんじゃなくて、OB訪問などで社会人と直接会う機会を何かしら作り、働くことのイメージを膨らませるとモチベーションに繋がると思います。」

最後に、進路に悩む学生に向けたメッセージをいただいた。

経験として外に出てみる (小林さん)

「一度県外に出てみる。そうすると山梨の良さがわかると思います。東京で仕事をすると、疲れたり、息苦しくなったりするんですよね。そんな時に地元である山梨に帰ってくると安らぐんじゃないかな。また、実際に東京で働くことで、地方とは時間の感覚とか働き方とか違うことがわかるし、そういうことを身をもって体感するのは、自分の経験として必要だと思います。」

将来なりたいのはどんな自分か (池田さん)

「私の場合、『なりたい自分像』を軸にして、この職業を選びました。だから、これから就職活動に挑むけど、やりたいことが分からないっていう人は、『将来なりたい自分』がどんな人なのか、まずは考えてみると良いと思います。」

〈学生をつぶやき〉

自分が思っていた通りの就職スタートでなくても、その経験から得られるものはたくさんあるし、続けてみて初めてわかることもあるのだなということを感じた。明確な進路が決まっていない場合は、まずは様々な経験をし、その中で自分の軸や将来なりたい自分を見つけていってもいいのではないかなと思った。(橋場)



学生時代の経験を糧に 映像を通してふるさとを伝える



武川清志朗さん

山梨県立大学国際政策学部総合政策学科出身。
やまなし観光推進機構で、映画やテレビ番組などのロケーションの誘致・支援にあたるフィルム・コミッションの取り組みを行っている。

【やまなし観光推進機構】

山梨県や市町村、観光関係団体等と連携し、国内外からの観光客の増加と山梨県の優れた産品の浸透を図ることを目的とする組織。平成25年4月に公益社団法人として新たなスタートを切った。

<https://www.yamanashi-kankou.jp/organization/index.html>

【フィルム・コミッション】

映画、テレビドラマ、CMなどのあらゆるジャンルのロケーション撮影を誘致し、実際のロケをスムーズに進めるための非営利公的機関。国内ばかりでなく国際的なロケーション誘致・支援活動の窓口として、地域の経済・観光振興、文化振興に大きな効果を上げている。

石拾いから見つけた進路

教師を志し、山梨県立大学に入学した武川さん。きっかけは、『石拾い』だった。

「小さい頃、公園や畑から変な石を拾ってくるのが趣味でした。その石は、よくよく調べてみると土器のかけらだってことがわかったんです。山梨って、縄文時代の遺跡が数多くあるんですね。「土器拾えとかすげえ!」ってロマンを感じました。それで、考古学に興味を持って、社会科や歴史といった分野の先生になりたいと思うようになったんです。

ただ、高校時代、大学を選ぶところまでは、進路について漠然としていました。

そんな時に、妹が美大に行きたいってなりまして。ぼくも絵を描くのがすごい好きで、いろいろな賞もいただきました。絵に限らず、『モノを造る』ってことが好きでした。その気持ちは、今にもつながっている部分があると思います。ただ、二人とも美大に行くってわけにもいかず、最初は国公立、都留文科大を受けます。ところが、面接で監督官の先生と口論になり、落ちたんです。「先生の考え方古いんじゃないですか?」とか言ってしまったんですね…。それで、私立大の法学部を受けたところとりあえず受かって。これでいいかなって思っていたんですけど、そこで『新しい公立大学が新設されるから、受けてみたら』ってことを先生に言われて、軽い気持ちで受けてみたんです。それが、山梨県立大学でした。」

在学時に築いた人脈の力

山梨県立大学1期生として入学した武川さん。当時の学課生は40人。学生間の仲間意識や、教授とのつながりも強かったという。『アクティブなやつが多かった』という人間関係の中で学んだことは、人脈作りの大切さだった。

「先生に『これがうちの学生です』と知人に紹介してもらえたり、仲間が外部で作った知り合いを紹介してもらったりして、どんどん輪が広がっていきました。そうすると学生の視野や価値観が広がってって、そうしてできたつながりのなかで、また新たなつながりを作ったりして。自分のフィールドを広げていくのを実感しましたね。」

築いた人脈を、山梨を盛り上げるために使いたいという思いから、『よつびし総合研究室』(注)という団体を設立した。

「『よつびし』の立ち上げは、地域貢献で新しく何

かやりたいって人たちの、『俺たちの力を外部のフィールドで試してみよう!』という思いからの行動でした。『学校がある、地域がある、仲間がいるんだからやってみないでどうするんだ』って考えて。1期生なので、やることなすこと先駆者になれるという気持ちもあったのかな。今行動したら1番になれるってというのは魅力的でしたね。」

注『よつびし総合研究室』

多角的な視野、知識を獲得し、地域振興に活かすことを目標とした団体。単位互換システムがあり、複数のゼミ、複数の大学の授業を受けることができる。

恩師の思いを受け映像制作の道に

現在の仕事は、フィルム・コミッション。映像を使い、ロケーション撮影の誘致、支援を行っている。

映像作成に取り組み始めたのは、高校生の時だった。初めは仲間内でおもしろ動画を撮る程度だったが、大学在学中の出会いが人生を変えた。

「大学の時に前澤哲爾(まえざわ てつじ)先生と出会ったのが転機となりました。メディア関係の授業をされていたんですけど、話や授業の内容がおもしろくて。あるときに、『フィルム・コミッションが山梨にはまだない。広めていきたい。』という話を先生から聞いて、映像を使った地域振興ができないか、ということを考え始めました。」

当時は深夜アニメが流行し始めた時代だった。アニメを使った地域振興が世間で出始めたころ、行政の動きを待つより早く、自分たちで行動を始めた。目指したのは、映像を使った地域振興だった。

「『行政の腰はまだ重い。俺たちが動いてしまおう。』と。有志でYDP(やまなし・ディスカバラー・プロジェクト)という団体を設立し、山梨県内を巡り歩いて、ロケーションデータの収集を始めました。時間ごとの日の入り具合や色々な角度からの見え方に加え、どういうシーンに使いそうかといったイメージに至るまで集めたかなり実用的なデータで、ぼくが在学中の4年間に加えて後輩たちの2年間の活動でようやく集めることができました。さらに、韓国・釜山で開かれた国際映画祭に山梨県のPR隊として、YDPのメンバーと参加することもできました。在学中に貴重な経験を積みさせていただいたということで、前澤先生にはとても感謝しています。」

モノ作りが好きだった少年時代。大学での活動を通して、海外に舞台を移すほどまで昇華させた。



どこまで自分が通用するのか 試したい

多くの体験を経て、『おもしろいことをやりたい』という漠然とした思いはあったものの、具体的な職種は浮かばなかった。地元に残るか、都市部に出るか、就活を目前に選択を迫られた。

「転機になったのは、在学中に出会った映像ディレクターさんに『実際の現場を見ないと、君の映像制作の才能が止まってしまう』と上京を勧められたことでした。映像制作っていつでも撮る人もいれば、照明や音響、企画に至るまでいろいろな職種の人があります。だから、映像作品を撮ってみようっていうのではなくて、いろいろな職種のなかから現場を見てみようという気持ちで上京を決めました。」

才能がひしめき合う東京での就職。そこに、不安はなかったのだろうか。

「それ以前は実家の農業を継ごうかくらいに考えていたのですが、東京に出ることに迷いや不安はそこまで感じませんでしたね。在学中の活動を通して学生時からすでにエキストラ集めなど、制作支援の形で山梨の映像制作には関わっていたので、『自分の力が通用するだろうか』というある種のわくわく感のようなものの方が大きかったです。」

東京から山梨へ

上京して入社したのは、映像・イベント運営会社。7人ほどの少数精鋭だった。大規模なイベントや映像制作、広告代理を中心に請け負う会社で、様々な種類のものに幅広く取り組むことで経験を培っていった。

「最終的には、天皇陛下がご出席されるイベントに携わることもできました。それを終えたときに『国内でこれ以上の規模はなかなかないだろう』と気持ちに区切りがつかしました。次のキャリアをどうしようか考えながら、仕事続けていた時に東日本大震災が発生しました。」

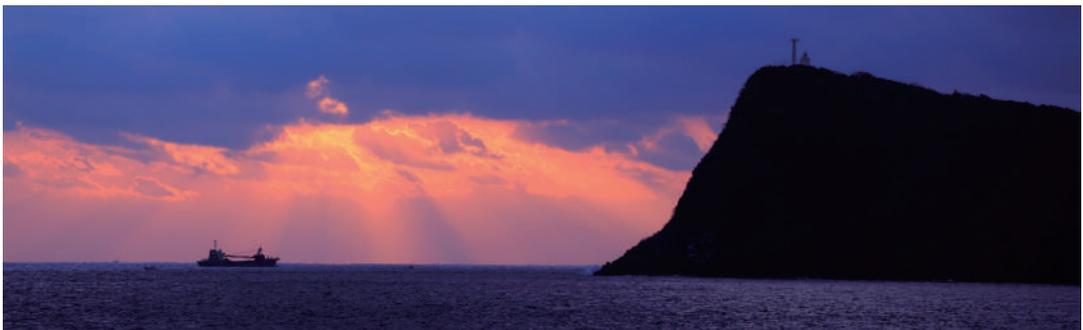
未曾有の大地震を機にふるさとの大切さを痛感し、山梨へ帰郷した。

『ふるさとのために、自分にも何かできることがあるのでは』

そんな思いをSNSに投稿したことが、次のステップへのきっかけとなった。

「投稿したSNSが、昔からの知り合いだった山梨県の観光部の方の目に留まり、非常勤職員としてフィルム・コミッション業務を手伝うことになったんです。そこから、県の観光推進機構に採用されました。」

学生時代に撮りためたというデータベースは現在でも仕事に活着していると語る武川さん。県内各地を巡り歩いた経験や、前職でのイベント企画・現場制作のノウハウが結びつき、現在の自分のキャリアを形作っているという。



イベント企画は山登り

最近では、山梨を舞台としたアニメ「ゆるキャン△」の制作支援やイベント『秘密結社ブランケット音楽祭』の演出・企画運営に携わった。

イベントを、特に地域主催のものを企画する際、意識していることがあるという。

「イベントを企画し、運営することは山登りのようなものだと思います。大切なのは、一緒に汗を流して難しい企画が成功できるように手助けすること。山登りの時、苦しい思いをしながらも、山頂に立つとその達成感から『次も登りたい』という気持ちが生れますよね。身の丈以上と思える難題をクリアすることで、次へという気持ちが生れます。気持ちに余裕もできるので、継続にもつながります。」

これは、役所だったり、県だったりじゃなくて、地域の人達が自分たちの手でやり遂げることが大切だと思っています。これは人生にも通じるのですが、一回自力で成し遂げたことがあれば、振り返って参考にできますし、自信にもなりますから。」

挑むなら目標まで不退転の覚悟を

漠然と『将来は東京に出よう』と考えている学生は多いと思うが、そこには『強い意志が必要』と語る。

「たとえばメディアやテレビの仕事ってきらびやかなイメージがあると思うけど、その部分への憧れだけではやっていけません。現場は甘くないぞ、というか。1度働こう、様子見しようという考えはやめた方がいいです。出ていったら出ていったで、数年間は自分の力を試してみるって心構えや決意がないと厳しい。特に映像関係は、早く辞めてしまう人が多い業界です。泥水啜る世界ですから。きついです。疲れたら一旦休みに戻るのは構いません。そういった意味では、山梨はいい環境かもしれないですね。都市部に出て、一旦戻ってきやすい距離ですから。ただ、どうしても踏ん張らなきゃいけない時期は必ずあります。もちろん無理は禁物ですが、期間でも仕事の内容でも、自分なりの目標と覚悟を持って、達成した後のセカンドプランのことにも目をむけられるのであれば外に出るべきだと思います。」

また、映像制作の道に関心がある学生には『企画力』を磨いてほしいと話してくれた。

「今は、表現の場がたくさんあります。SNSを利用したり、Youtubeとかですね。みんながみんな、発信者になれる時代です。ただ、映像でごはんを食べていくなら、専門学校を出た人には勝てません。もし専門の人達に、ぼくらみたいな専門じゃない人が勝てる部分があったら、企画力です。自分の考えを、どうやったら他の人にわかりやすく伝えられるかってことですね。常に、『自分だったらこう思う』『他の人に伝えるためにはいつ？どこで？どうする？』ってことを意識できる人になれるといいと思います。」





〈学生のつぶやき〉

ゼミの活動で「秘密結社ブランケット音楽祭」にも関わらせていただきましたが、その時から武川さんは「バリバリ仕事のできる頼れる大人」の一人でした。そんな大人に助けてもらうことができ、かつ自由と時間がある今のこの大学生という立場は、かなり恵まれていると今さらながらに気づきました。

『ポーっと生きてんじゃねえぞ!』
これまで流されるままに生きてきた私にとって、身が引き締まる思いがしたお言葉です。(山田)

『ポーッと生きてんじゃねえ！今がチャンスだ！』

学生時代は積極的に外のフィールドに飛び出し、社会人になった現在も第一線で活躍している武川さん。自身の学生生活を踏まえて、学生へのメッセージをいただいた。

「大学生は、知識を貯めるだけでなくアウトプット、昇華する時期だと思っています。知識がある程度あって、かつ大人に頼ってもいい、失敗してもいいっていう唯一の時期です。大人だと、これがビジネスになってしまっているので、それはいきません。だから、バイトに励むだけじゃなくて、『将来に近付いていく、つなげていけるような体験を沢山してやる！』って気持ちでいてほしい。あと、大学生には正しいと思うことをしてほしいと思っています。『正義たれ』というか。小ずるいことなんて、大人になってからいくらでもしなきゃいけなくなります。自由も利かなくなります。どうしても違うってことは、大人が直してくれるから、思い切ってぶつかってください。ぼくみたいに、大学時代の経験が今につながっている例もあるので、皆さんには多角的な視野を持って外のフィールドに出て、色々な経験をしてほしいです。『しっかり楽しましょうね』『ポーッと生きてんじゃねえぞ！』ってことですね。

ぼくは自分を高めるのが、『人間の本懐』だと思っています。

仕事場は今の自分を試す『発表会』の場所です。自分の人間力を高めるため、周囲とのつながりや今までの経験をフルに活用して、次のステージにチャレンジする。そんな仕事に巡り合えるといいですね。」

SUPPORTERS

＼ご支援ありがとうございました／

青い空白い雲様

アスフィール株式会社様

株式会社早野組様

熊坂治様

甲府花子様

齋藤浩志様

酒井大介様

清水至様

高野雅裕様

早川亜希子様

福田隆憲様

フォネット株式会社様

山梨太郎様

やまなし様

Ai Nagayama様

Hayakawa T様

Hiroyuki Kobayashi様

Hsshonan75様

TMY様

Tsuyoshi Kobayashi様

Y.I様

(50音順、アルファベット順)

編集後記

山梨県内で、いろいろな方が、それぞれの考えをもって活躍し、生きています。私たち自身もこの活動を通して、今まで知らなかった職種の方に出会えたり、新たな発見があったりと、学んだことは数知れません。この冊子を読んでもくださった学生のみなさんには、先入観などで決めつけたりしないで、まずはいろいろな人や企業に出会い、自分の知っている世界を広げてほしいと思います。そして、自分の将来について見つめる時間を、少しでも作っていただければ幸いです。

最後に、この活動に関わってくださったすべての方々に感謝の気持ちを伝えたいと思います。本当にありがとうございました!!

インタビューさせていただいたみなさま
(掲載順)

- | | |
|---|---|
| BEEK DESIGN
株式会社早野組 | 土屋誠様
田中友浩様
白須瑛紀様
金丸香様 |
| 株式会社フォネット
山梨学院大学
山梨英和大学
山梨県立大学
株式会社ネオスペース
アスフィール株式会社 | 小俣美沙紀様
赤川菜摘様
深津菜那様
土屋朋大様
石倉千春様
梶原春菜様
興津拓様 |
| 笛吹川温泉 別邸坐忘
やまなし観光推進機構 | 小林裕介様
池田はるか様
武川清志朗様 |

最後に、スペシャルサンクス!!
未来サロン参加者のみなさま、
Mt.FUJIイノベーションサロン参加者のみなさま、
澤さん、川口さん、やまなしクラウドファンディング
運営委員会の皆様、
鈴木梨玖さん、土屋直人さん、土屋真弥さん
ゼミの先輩方、田中敦先生 **And You...**



SAILORS(改訂版)

2019年3月10日発行

編集・発行

山梨大学生命環境学部地域社会システム学科
田中敦ゼミ2018年度3年生
(池田愛理、今井ちひろ、栗田寧桜、橋場あすか
三科百花、山田涼介)

写真協力

鈴木梨玖(同学科3年)

問い合わせ

Email:atanakazemi2018@gmail.com
(ご意見、ご感想ぜひお寄せください!)

Facebook:山梨大学田中敦ゼミ2018

http://www.facebook.com/山梨大学田中敦ゼミ
2018-265999247527485

Instagram:@atanakazemi2018

田中ゼミの活動情報は
ゼミホームページへ!→

https://tanaka-yamanashi.jimdo.com/





Our journey continues.